

M・オークショット著、中金 聰訳

『リヴァイアサン序説』(法政大学出版局、2007年12月発行、2835円〈税込み〉)

堀川 哲

マイケル・オークショット（1901–1990）はイギリスの哲学者。保守派として高名な哲学者である。その彼がホップズについて書いた論考をまとめたものが本書である。『リヴァイアサン』のオークショット版につけられた「intro」、そして「トマス・ホップズの生活における道徳的生活」、この2本の論考が本書の中核となる。

どちらもすでに邦訳はあるが、ともに入手が簡単ではないという事情を考慮して、新たに訳出されたものである。オークショットによれば、『リヴァイアサン』はこれまで英語で書かれた政治哲学の本では最高傑作である。オークショットはこう絶賛している。彼はホップズに惚れ込んでいるのである。保守の哲学者と自他共に認めるオークショットがなぜこれほどまでにホップズに惚れ込むのか、表面からみると奇妙と見える現象である。オークショットだけではない。レオ・シュトラウスやカール・シュミットといった思想家にとってもホップズは特別な存在なのである。

一般的には、保守派であればバークあたりを好むのが通例である。バークお好みの「伝統」とか「慣習」といったものが契約論的発想に対置されるのである。従って、社会契約論の元祖、そして唯物論・機械論の哲学者・ホップズは保守派の好みではないはずである。しかしオークショットをはじめ、高名な保守派哲学者たちにとって、ホップズは特別な存在であるように見える。これは奇妙な現象である。

じっさい、『リヴァイアサン』は不思議な魅力をもった作品である。ロックの『統治論』あるいはルソーの『社会契約論』あたりと比較しても、『リヴァイアサン』の特異性は明瞭である。『リヴァイアサン』は単なる政治論ではない。そこには、権力の解析学と混在して、形而上学(批

判)があり、機械論的世界観があり、人間心理の解剖学がある。そして膨大な『聖書』批判がある(『リヴァイアサン』のほぼ半分は『聖書』批判であり、これが『リヴァイアサン』の中核だ、という見方もある)。このカオス的ともみえる構成とホップズ独特の鋭い論法が私たちを『リヴァイアサン』の方に引きつけるのである。

さて、そもそもオークショットにとってホップズを読む意味はどこにあるのであろうか？それを読みとるのは容易ではないが、訳者によるオークショット解説を参考にして探ってみれば、オークショットはホップズの中に最良の懷疑主義をみる、ここらあたりにポイントがありそうである。『リヴァイアサン』の形而上学のベースとなっているのは科学革命時代の機械論哲学ではなく、むしろ古代以来の懷疑論的伝統であるとみるのである。(シュトラウスも似たような見方をとる)

プラトン的伝統は理性による真理の実現であり、政治権力は真理を実現する媒体である。このような発想はルソー、ヘーゲルにも連続している(ハイエクであればコントやマルクスなどをこれに加えるであろう)。権力の絶対性を唱えるホップズの政治哲学もまたプラトン的伝統に連結しているかにみえるが、もちろんそうではない。ホップズ哲学の基礎にあるのは人間・他者への不信、政治権力と宗教権力への絶対的な懷疑である。これが逆説的に政治権力の絶対不可侵性の主張を生み出すことになる。

このあたりのホップズ自身の理論構造は錯綜しているが、ホップズにおいては、政治権力は個人への支配という点では無力なのである。ロックやルソーの政治哲学においては、政治権力と個人とは、ホップズにくらべると、より緊密に結合している。「個人は国のために生命をかけて戦う義務はあるか」といった問題を考えれ

ばよい。ここではホップズとロック、ルソーとの差違は鮮明となる。ホップズはためらうことなく「自分のために生きよ」と語るであろう。オークショット的にみれば、これもまた権力と理性への哲学的懷疑の表現なのである。

『リヴァイアサン』を解釈する場合、ホップズの機械論哲学をベースにして（人工国家論として）解釈するのが普通の方法であるが、シュトラウスやオークショットの研究はホップズを懷疑の形而上学者として解釈する。もちろんこの場合には現代合理主義と現代民主主義・自由主

義への批判的意識が背景にあるわけだ。一見アカデミックとみえるホップズ解釈をめぐる論争も、そういう視点からみれば現代的な問いとなる。

ハイエクはマンデヴィルやヒューム、スミスを評価するがホップズは好みではないようだ。シュトラウスやオークショットはホップズにひかれる。このあたりの対照もおもしろい。その意味で、保守派哲学の深層にある心理をかいま見る上でも本書は参考となろう。

福岡伸一著

『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書、2007年5月発行、740円+税)

——工藤 孝史

私たちが見るもの、聞くもののすべては、私たちを含む世界に起こっている物理現象であること、またこの物理世界は、原子や分子といった粒子と空間から成り立っており、それを知覚しているわれわれ人間の身体と言えどもそうした物理現象のひとつであること——こうした原子論的なものの見方は今や常識のようになっている反面、はたして「私たち一人一人のからだが原子の集合体である」という実感となると、なかなかこうした実感がもてない。そしてその「集合体」である私は、なぜこの物理世界の「色」や「音」をさまざまに区別しているのか？ さらには、感覚器官をとおして獲得するこうした知覚を土台に、さまざまに行動しました思考しながら生きているのか？ こうした疑問に答えるとなると、原子から私たちの生活実態までの距離は遠のくばかりだ。

理由はいくつかあるだろう。まず第一に私のような自然科学とは関係のない人間は、普通は分子はおろか、それが合わさってできたとされる人間の細胞すら見たことがない。分子の運動から自分の生活をイメージできないのである。生き物の細胞をこの目で見たのは中学校の時に

ネギの薄皮を顕微鏡で見たのが最初で最後である。有機化学の教授をしていた伯父の研究室を見学に行って、遠心分離器だの高分子の模型などをを見せられたのも、遙か昔、幼い頃の記憶である。地球が自転していると「教わって」もそれが実感できないのに似ている。

人間の生の営みを分子レベルで実感できないもうひとつの理由は、おそらく分子レベルの「運動」と、普段私たちが経験している身体「運動」とのあいだにとてつもないギャップがあるようと思えるからだろう。鍋のお湯が沸騰してボコボコいうような運動と、私が今こうしてキイボードをたたいている運動では、少なくとも感覚的には大きな違いがある。

何にせよ、私たちの身体は小さな物質で構成され、それが複雑に（この形容詞はこの際何の役にも立たないような気もするが）関係して、生命が維持され、その生命は幾多の行動をし、その行動の中には「思考」もまた含まれる。私はこの膨大な連鎖について考えることが嫌いではない。しかし一体何処からどう手を付けたら良いのか……これは私がまえから気になっていた課題のひとつである。本書『生物と無生物の